

青葉通りにおける再生提案

余白としての青葉 その魅力と可能性

青葉通りは静岡大火のあと防災空地として出現し、その時々状況に合わせて利用されてきた。防火空地の役目を終えた今も、都市の中にこの“公園のような外部空間＝余白”が受け継がれてきたことは静岡にとってのストックであるといえる。余白をストックとしてとらえ、青葉通りに新たな可能性を探る。

「公園」として・「通り」として

青葉通りの特徴は、幅36m長さ500mという形状にある。ここに、のびのび使える“公園としての魅力”と、面白い出来事が次々に現われ歩くことを楽しめる“通りとしての魅力”を兼ね備えることができるだろうか。

西洋の街で最もアクティビティの高い“広場”と、日本の街に交流を生んだ“通り”の両者の性格を持ち合わせ、人々の賑わいが有機的に連続する空間を創る。

提案の概要

1. 幅36mの公園

長手方向の車道をなくし、幅36mをすべて公園にする。これにより、公園は安全で豊かな場所になる。また、店が公園に接することになり、お互いが関係し合う新しい商業のあり方が発想される。

2. 長さ500mの歩行空間

市役所から現常磐公園まで、車の交通と交差せず安全に歩行できる。直行する道路は時間により車両を規制し、昭和通りは立体交差して連続性を確保する。新交通トラムにより、周辺の交通の利便を高める。

3. 連続する賑わい

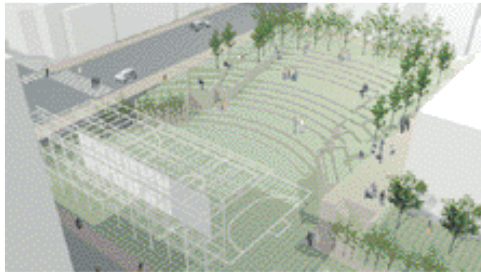
人々の賑わいの中心となる場所や、来街者が便利に利用できるいくつかのスポットを計画した。



都市の劇場／都市における演劇的なもの

青葉通りの中央にあたるこの場所を野外劇場として利用する。演劇やコンサートを開催するためのステージがあり、ステージを移動すれば、フットサルなどのスポーツ広場としても使うことができる。

季節の催事が次々に繰り出され、通りに活気を与え、道を通る人が自然に観客となる。ここに来れば、いつも何かしらのプログラムを鑑賞することができる、アクティブな劇場である。



まちなかグリーンオフィス／情報時代のビジネスポート

利用者は自分のノートパソコンを持ち込んで仕事することができる。データのプリントアウトや、コピー、FAX送受信は機器が用意され、自由に使うことができる。

郊外にオフィスを持つ企業やSOHOの人が中心街にある企業などへ訪問する際も、ここを中継基地として使えばよい。情報の集まる場所に拠点をつくり、時間を効率的に使うことで、新しいビジネスチャンスを生み出したい。そのほかに、小会議室、大会議室、近隣の公共図書館と連携した小図書館を併設する。



緑の架構／成長するアトリウム

スチールフレームは周辺の建物の平均的な高さに設定され、現存のケヤキも包み込む。足元には登攀植物が植えられ、架構を伝って徐々に成長していく。長い時間が過ぎると緑のアトリウムが出現することになるだろう。

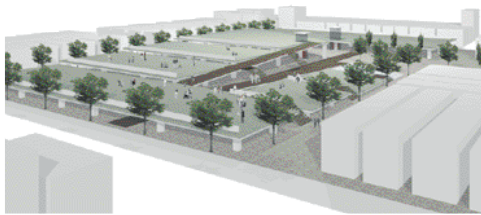
また、フレームから新しい「床」をつくることも可能である。階段をつけてフレームの2階レベルを市民ギャラリーなどに利用することができる。大きく跳ねだした床は休憩スペースとして使ったり、カフェテラス、花屋などの商業空間として使ったりすることができる。



ときわP／新交通と災害対策の起点

現常磐公園は新しい交通(トラム)の導入と連動して、駐車場として整備する。1階が駐車場となり、緑の屋根を公園として利用する。ここが人の動きの起点となり、市街地に新しい流れができる。

災害時には避難所として利用される。



とれたてハウス／栽培のススム

約50平方メートルに区画された畑と果樹園で、季節に応じた野菜や果物を育てる。すぐ横にはキッチンとダイニングテーブルが用意されていて、とれたての野菜や果物を調理して、いただく。子供や大人が畑での栽培を通して交流し、とれたて野菜のランチサービスなど、楽しい活動が考えられる。野菜や果物の収穫は青葉通りに季節感を与え、風物詩となる。



情報のショーウィンドウ／共有と検索の可能性

情報がつくる風景。

情報ショーウィンドウは、情報の新しいプラットフォームとして青葉通りでその役割を果たす。各商店からアップデートできる広告やお知らせ、イベントのインフォメーション、芸術作品の発表などがここにディスプレイされる。人々はここで情報を得たり、発信、共有、検索などを行う。

